

目 次

生命理工学研究科長・北爪智哉教授

就任の抱負

新任の先生の挨拶

岩崎博史教授 (分子生命科学専攻)

本郷裕一准教授 (生体システム専攻)

中村振一郎教授 (生体分子機能工学専攻)

伊藤武彦教授 (生命情報専攻)

立花和則准教授 (バイオ研究基盤支援総合センター) (生命情報専攻兼担)

活動・行事

5年目を迎えた東工大-清華大・大学院合同プログラム (赤池敏宏教授)

東工大-清華大・大学院合同プログラム・シンポジウム (丹治保典教授)

ようこそ先輩概要 (グローバル COE)

ようこそ先輩からのメッセージ (服部初彦)

高校生バイオコン 2009 (湯浅英哉教授)

高校生のための夏休み特別講習会 (福居俊昭准教授, 村上聡教授)

受賞

iGEM2009 で金賞 (田原進也)

学生の活躍

ポスドクインタビュー (森山明美)

海外インターンシップ (山田剛史)

ドイツでの学会参加 (茶谷昌宏)

留学生

Learn, unlearn and relearn (ChoonPing LIM)

Starting line drawing by TIT (Wang Qian)

就任の抱負

大学院生命理工学研究科長
北爪智哉教授

東工大の将来構想「東工大ビジョン 2009」で、東工大はその使命に基づき「時代を創る知・技・志・和の理工人」を育成することを基本方針とする。世界的な視野に立って大学力を高め、社会に貢献しうる分野を重点的に強化す

るとともに新しい価値の創造に挑戦する。また、自由と多彩性を尊重するとともに公正さを追求し、世界から信頼される存在を目指す----と述べられており、「教育、研究、国際連携、社会貢献」という領域で学生の育成を行



う。

このビジョンに基づいて、生命理工学部と生命理工学研究科では、理工学を基礎とした生命理工学の体系化と総合的發展を掲げ、理工学のみならず農学、医学、薬学、さらにはシステム工学などの広い学問領域の学際的相互作用により、国際的考え方の枠組みを担える人材を育て、授業の英語化に積極的に取り組み、諸外国の大学間でのプログラムを活用し人間味溢れる教育を推進していくつもりでおります。また、学部生の 90%程度が大学院へ進学するため、学部、大学院と一貫した理念で教育を行い、大学院ではテクノロジーをバイオに積極的に導入した異分野融合型の研究教育機関として教育と研究を両立していく道を進んでいきたいと思っております。

来るべき生命科学・バイオテクノロジー・医療福祉の時代を切り拓く有用な人材を養成し、科学技術サイドから社会的要望に応じていくために、生命理工学部・大学院の教育と研究を今後どのように展開するのかを、学内外の交流を通じ生命理工の組織構成員の協力を得て微力ではありますが全力を尽くしたいと思います。

新任の先生

着任の挨拶



分子生命科学専攻 岩崎博史教授

ゲノム上の遺伝情報は、安定に維持され、細胞分裂によって娘細胞に正確に伝わります。しかし、減数分裂期では遺伝情報が再編成し親とは異なったゲノム情報をもつこととなります。このように染色体ゲノムは、恒常性と可塑性の両方の性質を

兼ね備えたダイナミックな機能体です。私はこのようなゲノムの両義性に興味を持っており、分子レベルでこの問題を解明したいと考えています。

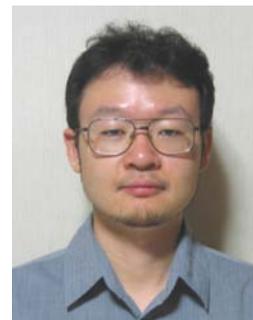
新任の先生

着任の挨拶

分子生命科学専攻 本郷裕一准教授

2009 年 5 月に着任しました。個体レベルの現象を分子生物学的ツールを用いて解明する分子生態学を専門にしています。具体的には、

シロアリと腸内微生物、および腸内微生物同士の共生関係の解明などを目指しています。シロアリ腸内微生物を含め、環境中の微生物の多くは培養困難です。それらの実体を解明するための微生物生態学、機能を解明するための環境ゲノム科学にも力を注いでいます。

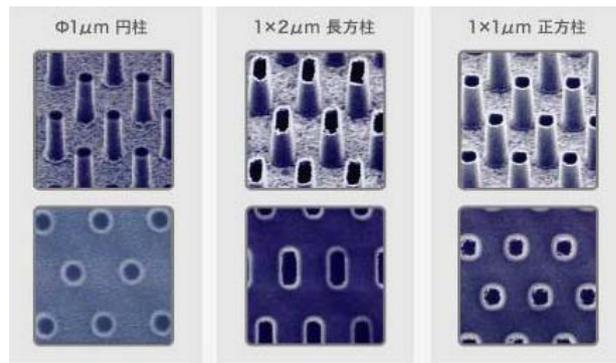


新任の先生

民間企業の研究者がなぜ連携客員教授をしているのでしょうか

生体分子機能工学専攻 中村振一郎教授

一昨年、新米の連携客員として生命理工生体分子専攻に着任しました。三菱化学に勤務する者です。民間企業で量子化学を主とした計算科学を研究開発に活用するために採用された一期生です。以来、長く産業界の課題解決型研究に携わってきました。会社の支持あってこそ始めたことですが、連携客員を積極的にお受けした自分の背景を述べて自己紹介とします。会社の仕事で出会う複雑で難しい研究課題の数々には、「学」に在るものとは違う「新しいサイエンスの萌芽」が無尽蔵といえるほど沢山眠っていることを経験してきました。その幾つかを徹底的に基礎から研究してみたいと感じていました。企業研究とは制限時間つきの目的研究ですから、いかに面白い現象に出会っても、目標に関係無ければ惜しげもなく置き去りにせざるを得ません。具体例をひとつ示しましょう。下に示すのは嘗て一緒に仕事をしていたデプト社という気鋭のベンチャーが見出した自己組織化構造体です。ある薄膜の試作製造を御願いしたとき全く偶然に出現したものです。私たちはペンネと呼んでいます。言うまでも無く、生体の形態形成と機能発現のメカニズムを律しているのは自己組織化という未踏の原理ですが、物質材料にもこれを解明するヒントは至



る所に遍在しています。それを手がかりにして生体系、とくに生体が光エネルギーを化学エネルギーに変換するメカニズムに焦点を当てて研究を始めています。学生諸君と日々活動をしている場所は青葉台にある三菱化学の横浜研究センター内にあります。このような試みが「学」にとっても「産」にとっても有意義に展開するために、一隅を照らす所存です。ぜひ議論においでください。

新任の先生

着任の挨拶



生命情報専攻
伊藤武彦教授

1995年にインフルエンザ菌のゲノムが解読されて以来、2000年のヒトゲノム概要配列解読終了に代表される様々な生物のゲノムが今では明らかにされており、我々はそれらの情報を容易に手に入れることが可能になっています。「生命の設計図」であるゲノムの解読は、その中にコードされた遺伝子の全容を明らかにするなど様々な情報をもたらしてくれます。しかし、ゲノム中に埋め込まれた生命体の基盤となる情報の中で明らかにされているものは、ほんの一部でしかありません。私達の研究室では、ゲノム情報と非常に相性がよいバイオインフォマティクス技術を駆使することによってゲノム情報を基盤とした生物学の発展に寄与できる様々な研究を行っていきたいと考えています。

1995年にインフルエンザ菌のゲノムが解読されて以来、2000年のヒトゲノム概要配列解読終了に代表される様々な生物のゲノムが今では明らかにされており、我々はそれらの情報を容易に手に入れることが可能になっています。「生命の設計図」であるゲノムの解読は、その中にコードされた遺伝子の全容を明らかにするなど様々な情報をもたらしてくれます。しかし、ゲノム中に埋め込まれた生命体の基盤となる情報の中で明らかにされているものは、ほんの一部でしかありません。私達の研究室では、ゲノム情報と非常に相性がよいバイオインフォマティクス技術を駆使することによってゲノム情報を基盤とした生物学の発展に寄与できる様々な研究を行っていきたいと考えています。

新任の先生

着任の挨拶

バイオ研究基盤支援総合センター
(生命情報専攻兼担)
立花和則教授

専門は海産無脊椎動物の生殖生物学です。ヒトデやクラゲなどの海の生き物がどのようにして子孫を残していくのか？ということ、主に細胞生物学的に研究しています。生物の多様性が重要であることは多くの人々に認識されつつある一方で、生物学者の研究対象はごく少数のモデル動物に集中しており、その多様性は減少しています。そんな中で、私は「変な」生き物たちとつきあいながら、「多様性から普遍

性へ」そしてまた「普遍性から多様性へ」行ったり来たりしつつ、「もっとおもしろい生物学」を目指して研究していきたいと思っています。外野手、右投げ、右打ち、名古屋大学大学院理学研究科生物学専攻博士課程（大沢野球スクール）、岩手県出身です。よろしくおねがいたします。



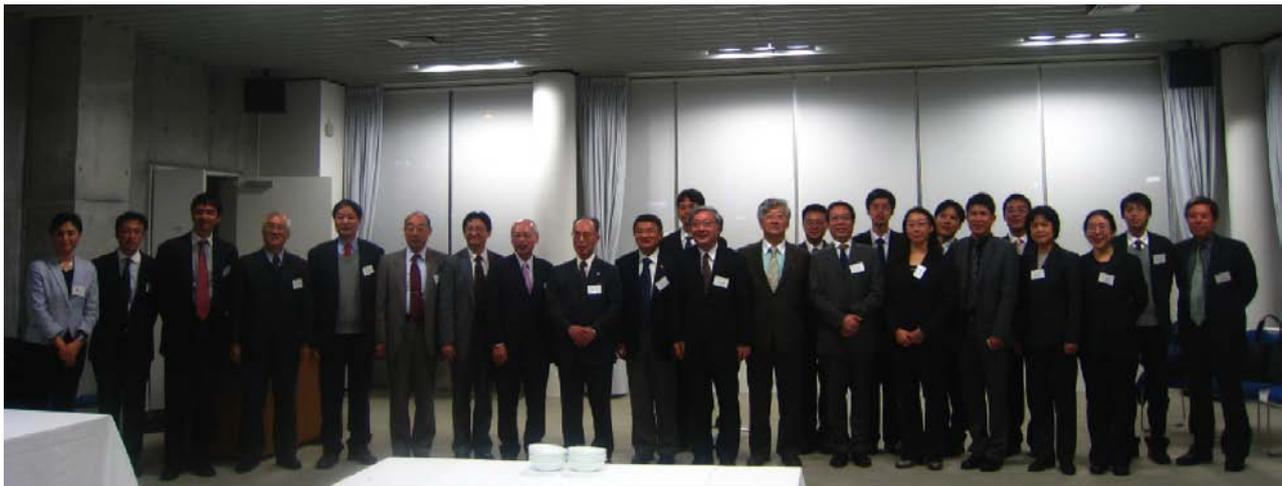
活動・行事

5年目を迎えた東工大-清華大・大学院合同プログラム

生体分子機能工学専攻
赤池敏宏教授

東京工業大学-清華大学大学院合同プログラムがスタートして5年を迎えた。この間、東工大から20人、清華大から64人と計84人の学生が参加した。07年度からは博士後期課程の合同プログラムもスタート、1、2期生からは相手大学の博士後期課程に入学した学生もいる。21世紀に入り日中関係は経済、人的交流の面で結びつきをそれまで以上に強めている。学術交流はこれらの結びつきをより深化させる人材育成の場として必要不可欠といえる。大学院合同プログラムは両国の学術交流を活性化するだけでなく、将来の日中関係をより発展させるものとして、さらにその存在意義を強めている。





東工大-清華大・大学院合同シンポジウムの参加者

活動・行事

東工大-清華大・大学院合同プログラム、シンポジウム

生物プロセス専攻
丹治保典 教授

東京工業大学は中国・精華大学と共同で、修士課程および博士後期課程の大学院合同プログラムを 2004 年にスタートさせた。科学知識と研究活動の経験を持ち、日本語・中国語・英語を駆使できる国際的な次世代リーダーを育成する戦略的事業と位置づけられた。同プログラム事業の一環として、両大学の研究交流を行うための合同シンポジウムを開催している。今年度は 2009 年 11 月 30 日（月）、東工大蔵前会館で開催された。プログラム発足から 5 年を迎えた節目の年に開催された今回のシンポジウムでは精華大学から 16 名の参加があり、清華大、東工大および同プログラムを支援している企業から合計 15 件の研究発表があった。若手を中心に活発な意見交換がなされ、相互の研究情報交換の場となった。シンポジウムに引き続き懇親会では、伊賀学長、相澤前学長、及び文部科学省の小松大臣官房審議官が来賓の挨拶をされ、本プログラムに対する熱い期待が述べられた。なお、来年夏には広州においてシンポジウムを開催すべく準備中である。

COE の研究・教育拠点に選ばれた生命理工学研究科は今年で 4 年目を迎えました。今年度も本研究科卒業生を招いて『ようこそ先輩』と題した講演会を 2009 年 12 月 2 日に、すずかけ台キャンパス(多目的ホール)にて開催しました。講師の先生が、生命理工学研究科での思い出や現在のお仕事などを熱く語っていただきました。

- (1) 等価交換? ~私の得たもの、失ったもの~
西山敦哉 (CNFS)
- (2) そしてこれから何をやりたいのか
澤智華 (聖マリアンナ医科大学)
- (3) グリーン・サステイナブルケミストリーと向き合う
服部初彦 (徳島大学)
- (4) 薬学部にはない強みを活かす
福澤拓 (中外製薬株式会社)
- (5) 初めてめてのこをやるのが、仕事です
高橋瑞稀 (第一三共株式会社)
- (6) 人生の選択肢を広げてくれた博士号
味岡逸樹 (東京医科歯科大学)

グリーン・サステイナブルケミストリーと向き合う

徳島大学
服部初彦博士

私は 2005 年に生体分子機能工学専攻の小林研究室で有機合成化学を研究していました。博士課程を修了した後、同じすずかけ台キャンパスの総合理工学研究科 物質電子化学専攻の跡部准教授（当時講師）の研究室で私は博士研究員として電子を使った有機合成の研究に携

活動・行事

**グローバル COE 特別企画
「ようこそ先輩」**

2007 年度から 5 年間にわたるグローバル

こでも生き抜くことができると思います。



活動・行事

高校生バイオコン 2009

分子生命科学専攻
湯浅英哉教授

先日、高校生が小中学生向けのバイオ教材を作って競う高校生バイオコンが開催されました(2009年10月10日すずかけ台キャンパス)。今年では第2回目、相模女子大学高等部、国立東京工業高等専門学校、横浜市立戸塚高等学校、東京都立新宿高等学校、麻布大学附属淵野辺高等学校、広尾学園中学校高等学校の6校から12チームが参加し、それぞれのユニークな作品を披露しました。「その血、止めます、私達」というタイトルで、血液の仕組みを学ぶ教材を作った相模女子大学高等部の血液戦隊いるんジャーが優勝を勝ち取りました。彼らを指導しコンテストをサポートしたのは、我が生命理工学部のボランティアの大学生達です。小学生から大学生、さらには小学生のご両親までが一体となって一つのイベントを盛り上げる素晴らしい取組です。地域教育の発展に役立つと良いですね。

りました。その当時、有機合成化学の中でクリーンな試剤である電子や繰返し使用可能なイオン液体を扱っていたことと京都議定書の批准が私にグリーン・サステナブルケミストリー(以後GSC)の興味を持つきっかけとなりました。そこから、産総研、アメリカ、徳島大学とGSCをベースにした有機合成化学の研究をしてきています。最近、日本では温室効果ガスを1990年に比して25%削減するチャレンジ25キャンペーンが始まり、ますますGSCの重要性が増してきたことから今回のタイトルと内容を考えました。

その内容は、GSCの概念を説明し、金属触媒を回収するための分子設計、欲しい物だけを合成する触媒反応と廃棄物を出さない反応の開発を紹介しました。他の演者とは毛色の異なる演題になってしまいましたが、どうしても伝えなかった内容でした。

こうした基となるのは、博士後期課程時代で授業もなく、朝から晩まで研究に打ち込む環境を得られ、先生とのディスカッション、研究室メンバーだけでなく周りの研究室と切磋琢磨し合うことを通じ有機合成化学を深く考えることができたことでした。特に、今思い出すと先生とのディスカッションというのは、先生が得た知識を吸収できる場であり、もっと積極的に行ったほうが良かったと思います。この時期に得た技術・知識は今も覚えており、しっかりと自分の物になっていると実感しています。

こうして川上の基礎技術である有機合成化学を身につけたことで、現在、細分化されている有機化学のどこの分野でも生かすことができ、さらに有機合成化学を通じて人と人との繋がりも作ることで来ました。アメリカにいる恩師によく「武器は常に磨いておくこと」と言われました。これは、学生時代から研究している有機合成技術を武器として常に研ぎ澄まし、技術的なことだけでなく、知識に関しても幅広く知っておくようにということでした。

博士課程で身に付けて欲しく、伝承したい言葉は、「確固たる武器を得、常に研ぎ澄ましておく。」であります。武器を得た東工大生はど



行事

高校生のための夏休み特別講習会

生物プロセス専攻専攻
福居俊昭准教授
分子生命科学専攻
村上聡教授

《超好熱菌がつくる耐熱性酵素の不思議! ?》

福居研究室では「超好熱菌がつくる耐熱性酵素の不思議! ?」というテーマで、超好熱菌由来酵素を題材とした実験を設定しました。超好熱菌とは鶏卵であればゆで卵となって固まってしまうような高温を好んで生育する極限環境微生物です。その超好熱菌が産生する酵素・タンパク質は高い耐熱性を有しており、熱安定な酵素として産業応用が期待されています。高温で生きる超好熱菌がもつタンパク質を取り扱うことによって、受講生に生命の不思議さと能力について感じてもらうことを目指しました。超好熱菌由来の耐熱性酵素を発現する組換え大腸菌を題材として、まず大腸菌菌体からタンパク質抽出液を調整し、それを 85°C で熱処理しました。この熱処理によって大腸菌由来のタンパク質は熱で変性沈殿するが、超好熱菌由来酵素は熱にも安定で可溶性を維持できることを電気泳動によって確認しました。また酵素活性の検出を高温で行い、超好熱菌由来酵素は高温で高い触媒活性を示すことを体験してもらいました。

《お米のゲノムで品種をあてる! 》

村上研究室では、受講生それぞれの家庭からコメ粒を持参させ、そこからゲノム DNA を抽出し、コメのジェノタイプングを行い、品種の特定をするという実習を行いました。新型インフルエンザの特定や、食の偽装問題、科学捜査などでも用いられ、新聞、ニュースなどでもしばしば耳にするその先端技術を実施するというので、多くの受講生は興味深く真剣に取り組んでいました。ほとんどの受講生は上手く品種が特定でき、「コシヒカリだ!」「あきたこま



ちだ!」と喜んでいました。また、普段口になっているお米にも遺伝子 DNA が含まれているという事を実感したようで、遺伝子組み換え作物の安全性などについても考えるきっかけを与えたようで、神妙に講義にも耳を傾けていました。

受賞

iGEM2009 で金賞

バクテリアを使った火星のテラフォーミング

生命理工学部 3 年生
田原進也

iGEM は国際的な生物学版の“ロボコン”とも呼ばれており、学生主体のチームが BioBrick と呼ばれる規格化された遺伝子パーツを組み合わせることで、新しい生命システムの設計、構築を行い、その成果をプレゼンテーションして競い合う大会です。

東工大は今年で 4 度目の iGEM 出場となり、東工大は今年まで 3 年連続で金メダルを受賞しました。

iGEM2009 は 10 月 31 日から 11 月 2 日までマサチューセッツ工科大学(MIT)で開催され、世界から全部で 103 チームが参加しました。

東工大チームは、生命理工学部 3 年生 9 名と工学部 4 年生 1 名、総合理工学研究科修士 1 年 2 名、東京大学大学院情報理工学系研究科修士 1 年 1 名が中心となり、総合理工学研究科知能システム科学専攻木賀大介准教授などの指導の下、3 月からプロジェクトを始動させ、その成果を MIT で発表しました。

今年の東工大チームのプロジェクトはバクテリアを使った火星のテラフォーミングです。テラフォーミングとは惑星を人間が居住可能な環境に改変することです。火星のテラフォーミングを達成するためには、火星を植物が生育できるような環境に改変しなければなりません。植物が火星で生育するためには、有機物の堆積と気温の上昇とその安定化が必要となります。有機物を堆積させる方法として鉄酸化細菌の利用を提案しました。また、気温を上昇させる方法としてバクテリアのメラニン合成による黒色化、気温の安定化の方法として温度感受性センサーの利用、さらに低温での凍結を防止するために不凍タンパク質の導入を提案しました。

そして東工大チームは鉄酸化細菌の培養、大腸菌へのメラニン合成経路の導入、温度センサーの開発、大腸菌への不凍タンパク質の導入を成功させました。

東工大チームはものづくりセンターならびに相澤基金の金銭的支援を受け、iGEM2009 に出場しました。

学生チームメンバーは下記の通りです。

<生命理工学部>

- 田原進也 (生体分子コース 3 年)
- 小泉智洋 (分子生命コース 3 年)
- 弘田啓時 (生命情報コース 3 年)
- 若林知伸 (生命情報コース 3 年)
- 仲谷奈央 (生体分子コース 3 年)
- 大島由衣 (生体機構コース 3 年)
- 司馬博 (生命情報コース 3 年)
- 武山祐 (生物工学コース 3 年)
- 志摩喬之 (生命情報コース 3 年)

<工学部>

- 西田暁史 (制御システム工学科 4 年)

<大学院総合理工学研究科>

- 網蔵和晃 (知能システム科学専攻, M1)
- 菊田剛 (知能システム科学専攻, M1)
- 井口了太 (知能システム科学専攻, M2)
(インストラクター)
- 関根亮二 (知能システム科学専攻, M2)
(アドバイザー)
- 鮎川翔太郎 (知能システム科学専攻, D1)
(アドバイザー)

<東京大学大学院情報理工学研究科>

- 川又生吹 (コンピュータ科学専攻, M1)



急車が滑り込む。それらを眺めながら「随分遠くへ来てしまったなあ…。」とつぶやいた。去年の 12 月、私は米国ボストンにいた。場所は小児病院に併設された研究棟の一室。ポスドクのインタビューを待っていた。

自分は博士課程ではメダカを使って研究していたのだが、メダカと言うと、多くの人にとっては童謡の「メダカの学校」のような牧歌的なイメージが伴うらしい。しかしメダカ並びにゼブラフィッシュなどの小型硬骨魚類が医学研究のツールになっていることは意外に知られていない。魚は卵生の脊椎動物である。卵生なことで遺伝子操作がしやすく、さらにヒトと同じ脊椎動物なので生理機構の多くが似ていて、ヒトの病理疾患モデルとして最近是利用されている。

そのラボは、長年ゼブラフィッシュを使って造血機構の解明に取り組んでいて、最近は今まで構築してきた大規模な魚のシステムを生かし、血液疾患や癌の薬剤スクリーニングも行なっている。PI はちょび鬚を生やしたマリオ似の大男。彼は心底楽しそうに現在進行中のプロジェクトを次々と説明する。最近の成果は、造血幹細胞の増殖を促すか化学物質をゼブラフィッシュでスクリーニングしてきたこと。それが今年になって薬として認可が下り、現在臍帯血移植での臨床試験に入っていること。「魚からヒトへの初めてのケミカルなんだよ！」と嬉しそうに言う。いくつか簡単な質疑応答のようなやりとりを繰り返した後でマリオは言った。「魚を使って世界を変えたいと思わない？」

夕日で一面オレンジ色の部屋。時差ボケで半ば眠い自分。が、その一言でわずかに興奮を覚えつつ「随分遠くへ来てしまったなあ…。」とまた思った。

その後日本に帰って数日、ちょうどクリスマスにポスドク内定のメールが来た。がんばって学位をとらねばならない。



学生の活躍

ポスドクインタビュー

生命情報専攻, D3

森山明美

夕日が大きなガラス窓から斜めに差し込む。部屋は 7 階だが天井が高いためかそれよりずっと高く感じる。遙か階下には、ビルの間を足早に行き交う人々と車。時折、車列を割って救

学生の活躍

海外インターンシップ

分子生命科学専攻, D2

山田剛史



初めまして。私は、生命理工学研究科分子生命科学専攻、関根・清尾研究室所属 博士課程 2 年、山田剛史です。私は、博士一貫コースの派遣プロジェクトで、一昨年の 2 月から昨年 2 月までの一年間、ボストンにある製薬ベンチャー企業であるアルナイラム社でインターンシップスチューデントとして働

いていました。本稿では、私が派遣プログラムでアルナイラム社を選んだいきさつや、海外インターンシップ中の生活について書こうと思います。派遣プログラム等で海外留学やインターンシップをしようかと考えている人の一助となれば幸いです。

(1) 受け入れ先を選んだ理由と留学準備

博士一貫コースは、3 カ月以上の海外留学か企業研修を行う派遣プログラムが必須ですが、私は、自分の行っている研究とのつながりから RNAi などの核酸医薬について興味を持っていたので、その分野のリーディングカンパニーであるアルナイラム社へのインターンを希望しました。担当教員である関根教授のついでにアルナイラム社のモノハラン博士を紹介していただき、インターンシップを受け入れてもらいました。その後、留学期間中の私の安全保障の取り決めに 4 カ月、DS-2019 という J1 ビザに必要な書類の準備に 2 カ月かかりました。私にとって留学は初めての経験で、アルナイラム社にとっても海外インターンの受け入れは初めてだったので、非常に困難なプロジェクトでしたが多くの人の助けを得て達成することができました。

(2) 海外インターンシップ中の生活

インターンシップ期間中は、メディシナルケミストリーグループの合成部門で研究していました。MIT 周辺は、製薬企業やライフサイエンスベンチャー企業が多数存在しています。アルナイラム社はその企業群の一つであり、RNAi に根差した新しい核酸医薬の開発を目指しています。

ボストンについての当初の私の英語能力は、買い物などはできるけれども仕事で複雑な会話をするのは厳しいといったレベルでした。初めは苦労しましたが、だんだんと上司や同僚とコミュニケーションをとることができるようになりました。自分が話すときは、思いつく限り

もっとも平易な表現で、大きな声で、ゆっくりしゃべるように心掛けました。意外と何とかなるものなので、英会話が苦手であっても留学を躊躇することはないと思います。

私は当初 6 か月のインターンを計画していましたが、途中で滞在期間の延長申請を行って最終的に 1 年間ボストンに滞在し、受け入れ先で行っていた研究を一区切りさせて帰ってきました。博士課程の期間中の留学という、博士一貫コース独自の制度には一長一短があると思いますが、所属する研究室と異なる環境で学べることは非常に多かったです。

学生の活躍

ドイツでの学会参加

生命情報専攻, D2

茶谷昌宏

こんにちは。私は 2009 年 9 月にドイツの Bonn で開催された ELGRA (European Low Gravity Association) という学会に参加してきました。この学会には、「重力変化における細胞への影響」について研究している人達が世界中から集まってきました。

私たちはこれまでに破骨細胞の動態を生きた動物個体の中で解析するためにメダカを用いて研究してきました。特に近年、宇宙飛行士の報告から無重力状態における破骨細胞の活性が注目されており、その影響を加重実験というアプローチで試みてきました。

「海外の学会に一人で参加」という初めての経験に出発前はなることやらと若干青ざめていましたが、すぐに向こうの環境に慣れ、楽しい時間を過ごすことができました。英語での口頭発表も無事にこなし、さらには様々な国の研究者と議論や交流を持つことができ大変充実した学会となりました。目

に映るヨーロッパの風景、匂い、音楽、お酒、感じるもの全てが新鮮でした。最終日にはドイツ航空宇宙センター (DLR) の見学をさせていただき、今まで経験したことのないエキサイティングな思い出となりました。



留学生

Learn, unlearn and relearn

生物プロセス専攻, D2
ChoonPing LIM

I am a Malaysian student currently pursuing my doctoral study in Tanji laboratory, Department of Bioengineering. I will be entering the third year of my study this coming April 2010. My research is about the Microbiologically Influenced Corrosion at oil-gas related facilities. Tanji laboratory is like a small "United Nation" of which about one third of the lab members are foreign students from different countries. Having labmates of different nationalities in the same research environment, including Japanese, is really a great opportunity for us to interact and exchange ideas on research. And along the process "Learn, unlearn and relearn".



留学生

Starting line drawing by TIT

生体分子機能工学専攻
Wang Qian

I am a international graduate student belonging to integrated course in TIT, and now I am carrying on my research work, organic reaction development, in Kobayashi lab where I start my scientific dream. My name is WANG Qian, have graduated from Tsinghua University, Department of Chemical Engineering, in China. The terrific change of the major at first made me confused. However, my supervisor who is a fantastice knowlegable chemist leads me



coming to the organic artistic hall and satisfied my eager of trying new expieiences. And also, he gives me a lot of care in study and life. Furthermore, my lab members are very excellent, not only in the research spirit but their charm in charactor which have influenced me so much.

I love my lab more and more. Now I am in the second year of master course and I will spend several years here to enjoy my study life which will be one of the most valuable expirence in my whole life and definitely a indispensable key to open my future.

編集後記

すずかけ台キャンパス通じる小道が整備され、きれいになりました。一方、生命の大学院カリキュラムがリニューアルされ、充実してきました。特に、国際舞台で活躍する学生の教育に力を入れています。

年度末の慌ただしい時期に、ニュースレター発行に向けてご協力頂いた多くの方々に感謝いたします。

ニュースレター編集委員長
小林雄一
生体分子機能工学専攻
平成 22 年 3 月 20 日
